

第6章 年齢・言語環境に合わせたテストの実例

図10に示した原型OBC（17ページ）を見て、これではうちの子どもたちにはとても難しすぎて、歯が立たない、また逆にとても易しすぎて、役に立たないと思われる方もいるだろう。子どもには、難しすぎるテストも易しすぎるテストも害がある。そのため、できるだけ、子どもの年齢、言語環境に合わせてテスト自体を調整する必要がある。第6章では、これまでのフィールドテストの経験を踏まえて、どのような子どもに、どのような調整をしたらいいかということについて、実例を示して述べたいと思う。

1. 年齢との関係

言うまでもなく会話力は年齢が上がるとともに伸びていく。母語（第一言語、または強い方のことば）の場合でも、話しことばの基礎が定着するのは8歳前後と言われる。母語で出来ないことを外国語や弱い方のことばで期待するのは当然無理であるから、OBCでも8歳以前の子どもには、高度の会話力は期待できないということになる。また会話力を土台にして、読み書きの力が伸び、抽象度の高い語彙を使ったものが母語で読めるようになるが、その力が定着するのが10歳以降と言われる。したがって、10歳以前の子どもには、高度な認知面の会話力も期待できないわけである。

図6に示したように、会話力は次の三つの軸を中心に発達していく。第1は場面との関係（場面依存度）、第2は言語知識との関係（言語知識必要度）、そして第3は思考力、認知力との関係（認知力必要度）である。年齢が低い子どもの場合は、自分と関係のあること、身の回りのこと、毎日経験することなどについて、簡単なことばを使って話すことしかできないが、だんだん年齢が上がるにつれて、だんだん場面に密着していないことも話せるようになるし、使える語彙や構文も

増えてくる。またかなり抽象的な内容の質問に対しても、自分の考えをまとめて、相手に分かるように話す力もついてくる。

実際にフィールドテストをしてみると、上に述べたような年齢との関係が如実に現われた。もっとも顕著だったのが、学校生活の入り口にある5、6歳児である。例えば、テスターが「いくつ？」と聞くと、それには答えず、遠くの車のモデルを指して「あの車だれの？」と聞く。話し相手にはお構いなしに、自分の興味のあるところに会話を持っていくのである。また伝言タスクで母親が留守だから伝言を受けるようにという指示にもかかわらず、テスターの「お母さん、いますか」という問いに対して、「お母さん、今うちにいるよ」と自分の状況を持ち込んで答えてしまうのである。つまり、相手に合わせて会話をしたり、場面を想定して違う人になって答えるというようなことがまだ困難な年齢ということである。このため、テスターとの自然対話である導入会話や基礎タスクはなんとかこなせても、ロールプレイを中心とした対話タスクとなると問題があった。

このような特徴は、言語環境、学習環境とはあまり関係なく、年齢特有のもので、日本在住の日本人の子ども（母語話者）も、カナダで育つ日系子女の子ども（JHL）も、また小学校で日本語を外国語として学ぶ子ども（JFL）にも、共通して見られたものである。つまり、この年齢の子どもには、学習環境から来る制約よりも、年齢から来る制約の方が大きいということである。

学校生活に慣れて来ると、このような問題が少なくなり、小学校2年生になると、テスターの意図を汲んで対話するということができるようになる。このような経験から、OBCでは5~6歳児を対象とした「年少者のためのOBC」を別立てにする

ことにした。年少者（5-6歳児）のためのOBC（81ページ）は、導入会話と語彙調べ（ウォーミングアップ・アクティビティ）を中心としたものである。

年齢との関係で問題になる第2の点は、認知面の会話力である。私たちの日本語母語話者調査によると、「公害について説明し、その対処について意見を言う」というような高度な認知タスクがなんとかこなせるようになるのが大体小学校5年生。4年生の中にも、わずかではあるが高度の語彙や構文を使って答えた生徒がいた。これに対して、外国語、継承語、第2言語の場合は、このような認知面の力は、一般的に4～5年遅れと言われるので、中学生にならないと母語話者と同じレベルの会話力は期待できないわけである。

一方、認知面の中でも「国語科」との関連で入れている「お話し」は、小学校低学年に適した認知タスクの一つであった。母語話者調査でも2年生から4年生までがよく反応し、5、6年生になると、要約だけで簡単にすまそうとする態度が現われ、年齢に合わないタスクという印象が強かった。

認知タスクは、以上のように、テーマの選択で年齢的制限を受けるものである。したがって、OBCを使用する際は、十分対象児の年齢を考慮して年齢相応に近い認知タスクの選択をしなければならない。またこの面は、どちらかと言うと、年齢要因よりも、つぎに述べる言語環境、学習環境の影響を受ける面であるので、年齢に加えて、それらの要因も十分考慮に入れる必要がある。

2. 言語環境・学習環境との関係

子どもの会話力は、その子どもの置かれている言語環境、学習環境によって大きく異なる。どの

ような形でそのことばへの接触があるのか、その接触の量と質によって、会話力の伸び方が大きく変わってくるのである。例えば、毎日の生活の中で接触すると言っても、子どもはそのことばを聞くだけなのか、それとも子ども自身が積極的にそのことばを使って意思疎通をしなければならない状況であるのかによって会話力に大きな違いが出てくる。さらに、家庭で使うだけなのか、学校の授業で算数、理科、社会などの学習にも使うことばなのかによっても、語彙、構文の面ばかりでなく、話せる内容の幅、質に非常に大きな違いが出るのである。

海外で育つ子どもたちの日本語を一例として考えてみると、第1章の表1（2ページ）に示したように、子どもの置かれた状況によって、日本語への接触の質と量が大きく異なり、それによって期待できる会話力も異なる。

JNLの子どもたちの多くは、日本語が家庭言語であると同時に、土曜日の補習校の学習言語でもある。家庭と週末学校の両方で母語を補強するので、基礎面、対話面、認知面が三拍子揃って高度に伸びる環境である。したがって、JNLの子どものOBCでは、導入タスク、対話タスクに加えて、高度の年齢相応の認知タスクを加えることが可能である。

これに対して、JHLの子どもの場合は、家庭で日本語を使用している場合は、放課後や週末の継承日本語クラスでの日本語学習を通して、かなり会話力が伸びる。しかし、日本語を使って教科学習はしないので、認知タスクには限界がある。この点を考慮して、JHLの子どものためのOBCは、91ページに示したように、基礎面、対話面を中心としたOBCにする必要がある。しかし、同じJHLの子どもでも、国際結婚で片親が日本人というケ

一スもあるし、また両親日本人でも現地語を家庭言語としている家庭もあるので、基礎タスクも含んだ幅のあるものにしておく必要がある。

JSLの子どもの場合は、日本語が外国語ではあるが、母語話者の児童・生徒に交ざって、学校での授業になんとかついていかなければならないというプレッシャーがあるため、在日年数が増すにつれて、基礎面、対話面、認知面の会話力が高度に伸びる。しかし、全くのゼロから始める子どももいるし、また学習初歩の子どもも混入している可能性があるため、95ページに示したように、3面にわたった幅の広いテストが必要とされる。

JFLの子どもの場合は、日本語への接触が学校の日本語の授業に限られているため、基礎面はなんとか伸びても、対話面、認知面はほとんど伸びない。図14 (85ページ) に示したように導入会話、基礎タスクを中心に、対話面は最小限に止めなければならない。子どもの力以上のタスクを課して、日本語への学習意欲の芽を摘んでしまわないように配慮する必要がある。ただし、同じJFLの子どもの場合でも、イマージョン方式の場合は、事情が異なり、外国語を知識獲得のツールとして教科学習に使うので、年齢相応に近い認知タスクが可能になるし、また対話力も毎日の教師とのやりとりを通して、自然に習得されていく。したがって、このような場合は、学校を場としたロールプレイや認知タスクを加える必要がある。

以上のように年齢差、言語環境、学習環境の要因を踏まえて、OBCを次の5つに類型化してある。それぞれの類型の名称と説明のページはつぎのようである。

	ページ
1 年少者(5-6歳児)のためのOBC	81
2 外国語学習者(JFL)のためのOBC	85
3 継承語学習者(JHL)のためのOBC	91
4 外国人子女 (JSL)のためのOBC	95
5 補習校生徒(JNL)のためのOBC	97

まず概要を図で示し、それぞれの類型の留意点を▼で示した。またフィールドテストで行った類型の実施例、それから得られた知見も加えた。

また、特にJSLのOBCテスト全体と実施の際の留意点を一覧表 (99ページ) にまとめてこの章の終わりに掲げてあるが、これはJSLばかりでなく、他の類型にも適応されるものであるため、参考にしていただきたい。

3. 2言語の関係

OBCテストは、バイリンガル育成を目指して開発されたものである。2言語のOBCテストを準備するに当たっては、次のような配慮が必要である。

まずJNL、JHLの子どもたちの現地語OBCは、ちょうどJSLの問題と同じであるため、JSLの日本語版OBCを参照していただきたい。次に、JSLの子どもたちのための現地語OBCは、ちょうどJHLの問題と同じであるから、現地語のOBCには、ぜひJHLのテストを参照していただきたい。継承語と第2言語(現地語)は裏腹の関係にあり、このような関係にある2言語の場合は、両方のことばでOBCを使用し、二つの言語の発達状況を逐次モニターすることが、第1章(5ページ)に示した、「高度バイリンガル型」を育てる上で非常に大事である。また言語への自信の喪失は、文化的帰属感への大きな心理的マイナスになるので、その面からも子ども自身の努力を促し、言語使用を

奨励する支援ツールとしてOBCは大変役に立つ。

JFLの子どもの場合は、事情が異なる。現地語が母語であり、母語と外国語では接触の量にも質にも共に大きな差があるため、2言語でテストをする必要はないと思った方がよいであろう。しかし、イマージョン方式の外国語学習の場合は別問題で、外国語の伸びをモニターすると同時に、学習言語に外国語を使用することによって、母語の発達が阻止されていないかどうかモニターする必要がある。そのために、OBCテストを使って、2言語の発達状況を調べることは大切である。

4. 年少者（5-6 歳児）のためのOBC

年少者用のOBCは、右の図13のように導入会話とウォーミングアップのアクティビティーからなる。導入会話は原型のフローチャート（17ページ）にそって、名前、年齢、家族のこと、誕生日、友達のこと、動物、好きな食べ物などをテーマとするとよい。ウォーミングアップとしては、語彙カードを使った語彙テストを中心とするとよい。

年少者OBCの実施に当たっては、次の点に留意する必要がある。

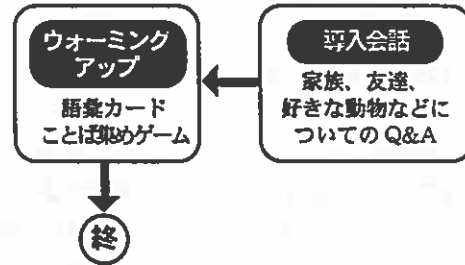
▼5、6 歳児の場合は、体力、集中力に限界があるので、時間をなるべく短くする必要がある。少なくとも十分以内で終わるようにした方がよい。

▼語彙テストは、第5章に示した40の語彙（55ページ）の中から、いくつか選んで使うとよい。なるべく子どもにとって身近かな語彙、生活に密着した語彙が望ましい。例えば、フィールドテストで行ったJFL低学年年テストでは、担任教師との話し合いの結果、次の22に絞った。¹⁾

【語彙テスト】

1 口	2 目
3 手	4 おやゆび
5 つめ	6 ぶどう
7 たまご	8 ミルク
9 牛	10 しっぽ
11 うま	12 そう
13 ねずみ	14 木
15 はっぱ	16 電話
17 やね	18 まど
19 つくえ	20 こくぼん
21 はさみ	22 ひこうき

図13 年少者のためのOBC



▼年少者対象の日本語OBCでは、テストは子どもが平常慣れている話体を使うようにする必要がある。特にJFLの子どもたちは、教師が授業で使っている話体しか理解しないので、「です・ます体」が日本語の授業で主に使われている場合には、「です・ます体」を使う必要がある。テストにとっては、子どもに「です・ます体」を使って話しかけるのは不自然であり、「だ体」を使って親しく話しかけたくなるものであるが、やや不自然であっても子どもが聞き慣れている話体を終始使用すべきである。しかし、子どもが慣れている話体があらかじめ分からない場合は、子どもの反応を見て、テストがその場で適宜判断しなければならない。

逆に、家庭で日本語を聞いたり、話したりしているJHLの子どもは、くだけた形の「だ体」に慣れているのが普通である。「です・ます体」で話しかけると反応せず、ぼかんとしている子どももいるので、注意が必要である。くだけた形とは、例えば、次のようなものである。（ ）の中に示したのは、「です・ます体」である。

- ◆ 「今何年生？」 （今何年生ですか）
- ◆ 「いくつ？」 （いくつですか）

- ◆ 「お誕生日はいつ？」
(お誕生日はいつですか)
- ◆ 「お姉さんいる？」
(お姉さんがいますか)

▼また家庭使用の子どもの中には、音声や語彙の面で、幼児語が残っている場合もある。例えば、「ら」行の音がおかしかったり、接頭語の「お」を付けて「おめめ」、「おてて」と言ったり、「わんわん(犬)」、「にゃんにゃん(猫)」、「ゴーゴー(掃除機)」のような擬音語・擬態語を使ったりする。これらは日本在住の母語話者児童の場合は、6歳当たりまでに消えるのが普通であるが、海外で育つ子どもの場合はかなり長引く傾向がある。日本語への接触が家庭内に限られるため、自然淘汰されるのに時間がかかるようである。極端な例としては、小学校2年生でもその特徴が残っているケースがあった。これまでのフィールドテストでも「おみず」、「ねんね(寝る)」、「歯ブラシしゅしゅ(はみがき)」などの例が観察された。

▼毎日のJFLやJHLの授業などで、教師が曜日、天気、色の名前についての質疑応答を意図的に繰り返すことがよくあるが、子どもの緊張感や不安感を取り除くために、日頃慣れ親しんでいる、定型化された会話を導入会話に加えるのも一案である。例えば、次のようなものである。

- ◆ 「今何時ですか」
- ◆ 「今日は何曜日ですか」
- ◆ 「今日は晴れですか、曇りですか」

▼2言語環境で育つ子どもの中には、一つの言語、あるいは二つの言語の力が母語話者に近い、あるいは、母語話者と変わらないという

子どもがいる。このような子どもの場合には、導入会話に加えて、認知タスクの「お話し」などを試みるとよい。

▼2言語に接触して生活しているJHLやJSLの子どもにとっては、5、6歳は継承語と現地語のことばの力関係が逆転する非常に大事な時期である。つまり、家庭言語として強かった継承語(親のことば)が幼稚園や小学校の生活を通して、現地人との交流が増し、だんだんに現地語の力が増すにつれ、継承語を追い越すところである。現地語を使って過ごす時間が多ければ多いほど、このシフトが早まる。この時期にOBCテストを継承語と現地語の両方で行って、その力関係を押さえておくことは非常に意味のあることである。親にも教師にも2つのことばを同時に伸ばす上で貴重なデータを提供してくれるからである。

実例1. カナダJHLの6歳児

カナダの日系移住者子女を対象とする継承日本語学校国語教室⁴⁾で、6歳児を対象としたフィールドテストを行った。全員12名を対象として予定していたが、大雪後の交通マヒのため、当日実際にテストを受けたのは8名(男子3名、女子5名)であった。二つの教室を使って、日本語OBCと英語OBCテストを行った。2名のテスターに加えて、教師の一人が、子どもを次の教室に同行し、一緒に順番を待つという付き添いの役をした。これは子どもの緊張感を緩和させるためである。また日本語の発達が遅い子どもは英語テストを先行させるように配慮した。実施に先立ち、保護者への説明、アンケート、実施承諾書を用意した。

日本語OBCの内容は、英語も日本語も大体17ページのフローチャートに沿った導入会話、それ

に「部屋」、「スポーツ」、「教室」、「許可」カードを使った基礎タスク、「伝言」「ねだる」「誘う」カードを使った対話タスク、そして、さらに認知カードの「お話し」を加えた。

語彙テストには、81ページの語彙にさらに8つの語彙を加えた。³⁾その後で、ウォーミングアップ・アクティビティーの一部として「仲間ことば集め」(果物の名前と動物の名前)(25ページ参照)、「しりとり」も同時に試みた。語彙テストで分かることと、ことばゲームを通して分かることの違いを知りたかったからである。

英語OBCは、導入会話に加えて、B-VAT⁴⁾の一部(語彙テスト)、対話カードは割愛し、認知カード「お話し」を加えた。

ちなみに国語教室(生徒数120名)はカナダの日系移住者子女4歳児から14歳までを対象とした土曜日午前2時間半の継承日本語プログラムである。1970年代、カナダが大量に技術移民を受け入れた時代に創設された学校で、もともと家庭言語が日本語である準一世、二世児を対象にしたものであった。しかし、30年を経た今日、国際結婚の家庭が増え、子どもたちの多くが片親が日本人で、家庭言語が日本語とは言えない状況になっている。従来は光村の国語教科書を使用して、ほぼ国語教育に準じた指導法が可能であったが、最近では、子どもたちの英語(現地語)へのシフトが早まり、それが困難になりつつある。1998年の調査では、両親共日本語が母語という家庭は29%、片親が日本人が71%に達していた。今後この傾向はますます強まることが予想される。

対象になった8名の6歳児は、1名を除き、全員4歳で就学、現時点で3年目を迎えたところである。いわゆる光村の国語教科書の1の上を使っ

た国語学習が前年の9月から始まったところである。8名のうち、両親とも日本語話者というのが2名、父親が日本語話者が2名、母親が日本語話者が4名であった。

まず語彙テストの結果であるが、個人差が大きく、最高は31語中25語正解(81%)、最低は4語(13%)、平均は約半分の16語であった。全員が答えられなかった語彙は、「起きる」「短い」。回答が少なかったのは、「やね」「こくばん」「おやゆび」などであった。

動物の名前をテスターと交互にあげるというアクティビティーをした後、果物の仲間ことばを言えるだけ言うというタスクでは、6語が最高、一つも言えなかったのが2名で、平均3語であった。語彙テストの結果と仲間のことば集めの結果とには高い相関関係が見られ、語彙テストが短時間で多くの情報を得ることが出来ることも確認できた。

導入会話と基礎タスクは、個人差はあっても、全員がこなすことができた。問題があったのは、「スポーツ」カードで、ほとんどの子どもが自分自身でまだスポーツというものを体験していないために、うまく答えが引き出せなかった。8名のうち2名は、過去2年以上の日本語の授業では、ほとんど口を開かず、日本語を一言も話さなかった子どもであるが、一対一のOBCテストでは、日本語で応答しており、教師を感激させた。

対話タスク、認知タスクは予想していたように、どれも子ども自身の体験不足で、かなり成長の早い生徒でも、テスターの誘導にもかかわらず、満足な答えは一例も出なかった。「お話し」もタイトルとか登場人物について部分的な話しはできるが、出だしが抜けたり、完結部分が落ちたりして、まとめて話すことは困難であった。5-6歳児には

対話面以上のタスクは無理だという予想は正しいことが確認されたのである。

英語では、すでに全員が英語の方が強い子どもになっており、英語では声にはりがあるのに対して、日本語では弱々しく、消極的で、顔もううつむきがちであった。導入会話は全員が問題なくこなし、英語の物語でも2名の子どもが「お話し」をすることがほぼできた。B-VATのテストは、実施方法に不備があったため、OBCテストの結果と合わせて検討することが残念ながらできなかった。継承語である日本語と主要現地語である英語との間にどのくらい差があるかということであるが、教師の予想に反して、英語も未発達というケースが多く、特にフレンチイマージョンの学校に行つてすでに2年目という子どもは、英語も日本語も混沌とした状態であった。

特に導入会話のみを取り上げて、日本語の力と英語の力を比較してみると、一人を除いて全員英語の方が得点が上であった。ちょうど現地校での学校生活が軌道に乗ったところであり、予想通り、英語の力が日本語を追い越していく真ただ中にある子どもたちであるということが実感として感じられた。

もっとも注目すべきことは、家庭環境との関係である。必ずしも片親が英語話者だから必ず英語が強くなる、また日本語が必ず弱くなるというわけでもないということである。ちなみに導入会話で80%以上をとった生徒4人のうち、片親が日本人の子どもが3人を占めていた。それも父親が日本人が一人、母親が日本人というのが2名であった。日本語教師の予想に反し、母親が英語話者であると日本語が弱くなり、英語が強くなるという傾向は見られなかった。むしろ、普段言葉遊びを経験している子どもとそうでない子どもとの間に大きな違いが観察された。そして、言葉遊びに、

慣れている子どもと、慣れていない子どもでは、反応が英語でも日本語でも異なり、慣れていない場合は、期待されていることを理解するだけで、非常に時間がかかったのである。

5. 外国語学習者（JFL）のためのOBC

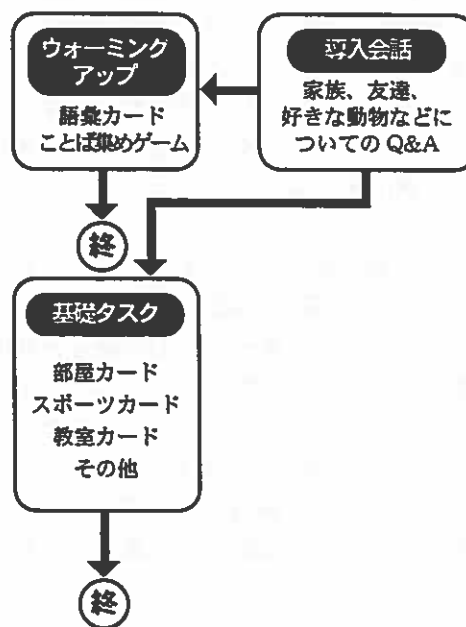
学校で外国語として日本語を学習している子どもの場合は、当然子どもの年齢と日本語の学習年数などによって期待できる会話力が異なる。しかし、おしなべて教室の中だけでは対話力が育たないのが普通であるから、右の図14のような導入会話、基礎タスクを中心としたテストにするとよい。

▼語彙中心のカリキュラムや文型で整理された教材を使って日本語を教えている場合には、語彙、文型の定着度を見るために、語彙テスト、基礎タスクを中心としたテストにする必要がある。その場合は、必要があれば、自作カードを加えるとよい。

▼JFLでは、教室の中で日本語教師が使う表現、語彙、話体しか子どもたちは理解しないから、テストは子どもに必要以上の不安感を与えないように前もって担任教師と連絡を取り、使える語彙、表現を確認した上で、なるべくその範囲の日本語で指示を与えるようにする必要がある。特に教師が「です・ます体」を使用して授業をしている場合は、テストは一貫して「です・ます体」を使用する必要がある。

▼同じ外国語学習者でも毎日日本語に接触しているイマージョン方式の日本語学習の場合は、問題が全く異なる。教師と生徒のコミュニケーションのツールとして、また教科学習のツールとして外国語を使用しているため、ある程度の対話面、認知面の会話力が育つ。このような状況では、意図的に、対話タスク、認知タスクを与えて、会話力の発達状況をモニターする必要がある。しかし、この場合、ことばの接触が学校内、教室内に限られていることによく留意して、無理な場面を設定しないよ

図14 JFLのためのOBC



うにする必要がある。

実例2. カナダの日本語イマージョン（JFL）

参考までに、イマージョンスタイルで日本語を教えているジャイルズ校で使用したOBCの例を紹介しておきたい。

ジャイルズ校はカナダの仏・英・日のトライリンガル・イマージョン校で、フランス語、英語に加えて日本語（または中国語）を教えている私立校である。毎日70分から80分の日本語による授業があり、日本語学習に加えて、日本語で算数と、理科（プロジェクトのみ）を教えている。対象になった生徒は28名（男子12名、女子16名）の英語話者、6歳から14歳までである。イマージョン

と言ってもフランス語（2時間）と英語（2時間）で主要科目をカバーするため、日本語の授業では、日本語学習を中心とし、それに算数が加わるという形になっている。算数では初歩的な4則計算とそろばんをやっている。日本語クラスでは、基礎会話の暗記・ロールプレイ、劇遊びなどを通して意図的な会話指導がなされている。⁵⁾

対象児の家庭言語は21名が英語使用、日系の母親3名（うち1名は家庭で英語使用）、インド系4名、イタリア系1名であった。日本語学習歴は1年生（学習時間約200時間）6名、2年生（約400時間）3名、3年生（570時間）11名である。その他5年生から日本語学習を始めて、現在1年2ヵ月から2年目になる年長組（9-10歳）6名と日本語学習歴7年になる11歳児と14歳児が1名ずつであった。

導入会話、語彙カード22枚（81ページに提示のもの）、基礎タスクは「部屋」「スポーツ」「教室」「日課」「職業」「許可」カードを使用、対話タスクは、「廊下で教師に会う」（教師自作）、「教師に電話する」（カード25）、「公園に友達を誘う」（教師自作）の三つである。いずれも教師との対話、クラスメート同士の対話にしぼり、カードも教師が教室ですでに使ったロールプレイ用の絵と劇遊びの絵をやや変形してカード化した。

認知タスクは、これまで経験した教科学習との結び付きを考え、右に示すように算数の簡単な足し算、引き算、掛け算、それに授業で体験した劇遊びのストーリーを自分で再生するというタスクを加えた。それぞれ学年によってお話しが異なる。

日本語学習歴7年の2名の生徒（母親が日本人で日本語使用、日本語学習歴7年）を除いては、ほとんど均等な日本語力を有していると判断され

たので、全員に同じテストをすることにした。所要時間は平均一人12分前後。どの生徒もテストを受ける寸前までは緊張した面持ちであったが、テスト終了時点では、明るい笑顔で日本語を話したという満足感を示して帰る生徒がほとんどであった。

以上の結果、予想したように、毎日の日本語授業を通して習得された会話力は基礎言語面の口頭能力が中心で、対話面、認知面が未発達である。しかし、わずかながら認知面の算数や国語（お話し）のタスクに耐える力があつたのが、この生徒たちの特徴と言えよう。基礎タスクは年齢差がほとんどなく、全員が50%以上の正解であったが、対話面では、全体的に日本語学習が3年目になると、自分で文を生成し、自ら情報提供などができるようになり、3年以上になるとかなり対話力が伸びる子どもが多いことが観察された。

【認知タスク】

「算数」

- ◆「赤いりんごが3つあります。オレンジが2つあります。全部でいくつありますか」
- ◆「あめが20こありました。7こ食べました。のこりはいくつありますか」
- ◆「えんぴつが一本10セントです。5本でいくらですか」

2 「お話し」

- ◆「お話しを1つしてください」
 - 「うさぎとかめ」（1年生）
 - 「おむすびころりん」（2年生）
 - 「さるとかに」（3年生）
 - 「かさこ地藏」（その他）

算数は、たまたまカリキュラム編成のため、日本語で学習しなかった4年生グループが2、3年生よりも得点が低かったことは興味深い。認知面のことばの力は、自然に任せておいたら、母語その他からの移転 (transfer) でまかなえる力ではなく、意図的な学習をしないと育たない力のようなものである。また「お話し」タスクでは、3、4年生にならないと難しかったが、1年目の7歳児の一人がつぎのような話をうれしそうにしてくれた。未熟であっても、自分で生成した文にはなっているし、筋があり、意味的なまとまりを見せている。

うさぎとかめ、かけっくあります。
うさぎはびよんびよん。
うさぎねます。
かめは、いちに、いちに。
かめさんのかち。
おわり。

学年が低く、日本語の力が低いほど、テストの日本語の質問に対して、英語で答える、あるいは英語を交えて答えるというのが多かった。特に一年生の中には、全く日本人と一対一になって日本語で話すというのが初めての経験というのがほとんどであり、子どもたちの中には、その窮状をなんとか自信のある英語を使って逃れようとしたり、またテストの質問にすべて「はい」と応答して、逃れようとしたり、いろいろのストラテジーが見られた。

英語使用は学年が上がるとともに減少し、だんだんに英語を使用せずに日本語でコミュニケーションが出来るようになる。さらに詳しく会話力の内部構造を調べてみると⁶⁾、予想通り英語の使用度といわゆる会話力とは互いに競争的關係にあり、英語使用が多ければ多いほど、日本語の会話力が低いということが分かった。また、態度・情意ア

ンケート調査⁷⁾の結果と合わせてみると、これも予想した通り、英語使用が、日本語の勉強は「大事ではない」「つまらない」というような否定的な態度と関係があることも分かった。日本語の会話力が増すにつれて、英語を混ぜずに話せるようになるし、またそうすればするほど、日本語学習にも積極的になるということである。

また算数の口頭応用問題も、会話力全体の中で特異な立場にあり、会話力があるから算数の問題にもよく答えられるという関係ではなかった。極端なケースではあるが、基礎タスク、対話タスク、認知タスク、そして語彙テストにはほとんど反応を示さず、会話力がもっとも低いと思われた子どもが、算数の足し算、引き算になると異常な興味を示し、きらりと目を輝かせて、即座に正解を出すという例もあった。知的活動と結び付けた日本語学習には、子どもが異なった興味、反応を示す一例と言える。

会話力では特に音声面、正確度に問題があった。音声面では、単音の発音やイントネーションに、英語の影響が強く見られた。毎日の日本語授業で会話を暗記、それを再生して、テープレコーダーに吹き込むというタスクが課されており、インプットが不十分な状況でアウトプットが強調されるために起こる問題であろう。また文法的誤りも自然接触を通して淘汰されるチャンスがないため、化石化する傾向が見える。以上のような問題は教室内純粋培養になりがちなイマージョン方式の語学教育一般に言えることで、その解決には、日々の授業内での教師の会話指導の改善もさることながら、母語話者との交流をいかにカリキュラムに組み入れ、日本語へ自然接触を増やすかということが大きな課題である。

ジャイルズ校の例は特殊な例ではあるが、OBC

会話テストを実施することによって、イマージョン方式で学ぶ外国人子女（JFL）の会話力の三面が、実際にどのような関係にあるのか、どのような関係でそれぞれの面が年齢・学年が上がるにつれて伸びていくのかなどについて数多くの示唆を与えてくれることが確認できた。（中島・アイザック・木田1998）

実例3. 日本のインターナショナルスクール

次に、1996年に東京の西町インターナショナルスクールで実施した英語OBC、日本語OBCのパイロットテストの試みについて述べておきたい。

西町インターナショナルスクールは、幼稚園から中学3年までの生徒（約400名）に英語を使って授業を行っている私立校である。創立の精神は国際人を育てるための日本人のための学校であったが、現在は日本駐在の外国籍の子どもが主である。しかし、実際には、外国籍の子どもばかりでなく、一般日本人の家庭の子どもも混在している。毎日の授業は英語で行うが、必須科目として日本語が入っており、幼稚部では毎日20分、一年生からは毎日45分の日本語授業が行われている。日本語クラスは3種類あり、一つは日本語母語話者のためのJNLコース、日本語以外の言語を母語とする子どもたちJFLコース、そして、その中間に行くJBLコース（日本語の力が母語話者レベルまでは行かないが、JFLの子どもたちよりも高い）を新設しようとしているところであった。JNLコースでは、国語教科書に準じた国語教育、プラス社会的内容的教材の教材が加わり、JFL、JBLコースでは、教師自作教材による日本語、日本文化紹介の授業が行われていた。

OBCテストの対象となった子どもたちは、小学

校2年、4年生、6年生の18名（各学年から6名ずつ、男女3名ずつ）である。子どもの家庭言語は3つのグループに分かれ、(a) 英語使用5名、(b) 日本語使用5名、(c) 日・英語両用3名、(d) その他（中国語、韓国語、タイ語、ドイツ語など）5名である。

使用したOBCテストは、日本語も英語も、17ページに掲げたフローチャート（英語版は18ページ）の原型になったVersion 4.0である。導入会話、基礎タスクでは1の「部屋」、2の「スポーツ」、18の「やりもらい」の絵カードを使用、対話面では9の「誘う」、10の「問い合わせ」、12の「伝言」カードを使用、そして、認知面では13の「お話し」と14の「公害」カード（6年生にのみ使用）を用いた。いずれも、現在の絵カードの原型になったもので、細部においては異なるが、使用目的その他基本的な面では同じカードである。しかし、この段階では、まだテストの発話は未整理で、かなりテストによって問いかけ方、話量にばらつきがあり、平均所要時間も各言語20分という長さであった。またこの段階ではウォーミングアップアクティビティーは、未開発であった。

家庭で英語を使用している(a)のグループの子どもたちの場合は、滞在年数にかかわらず、学校で英語で学習しているためか、英語OBCテストでは、非常に成績がよく、ほとんど100%に近い英語の保持率であった。一方、日本語力はどうかと言うと、日本滞在年数とは関係なく、かなりのばらつきが見られ、極端なケースでは、日本生まれであるにもかかわらず、導入会話もまともにこなせないという7歳児もいた。

国際結婚の家庭で、親の一人が日本語話者、もう一人が英語話者の場合、他のグループに比べ日本語、英語の三面（基礎言語面、対話面、認知面）

でもっとも高得点を得ている。特に高学年になればなるほど、高度バイリンガル型が増える傾向が見られた。

一方、(b)のグループの両親とも日本語が母語で、日本語が家庭言語の子どもの場合は、日本語の方は100%近い得点であるにもかかわらず、英語OBCとなると、対話面はなんとかこなせても、基礎面と認知面はかなり落ち、いろいろな問題が見られた。基礎面においては、文法的な誤りが多く、テンスの不一致、名詞の複数形、動詞の活用、冠詞の脱落などがその主なものである。これに加え、認知面では、筋道を立てて話せない、接続詞andの過度の使用、単純な構文の繰り返し使用などの特徴が見られた。

(c) (d)のグループの場合は、家庭言語は非常に複雑で、個々のケースにより、事情が非常に異なる。例えば、日本生まれ、日本育ちのドイツ系スイス人の2年生(7歳児)は、日本語の導入会話さえおぼつかなく、「お話し」になると、急にドイツ語で話し始めるという状況であった。英語の方はどうかというと、発音に問題があり、単文レベルの英語しか話せなかった。ドイツ語のレベルは知る由もないが、英語においても日本語においても学習にたえるだけのことばの力を持ち合わせていない、いわゆる「両言語低迷型」で、多言語環境で育つ一つの犠牲例とも言える。

同じトライリンガル環境で育つ日本生まれ、日本育ちの場合でも、非常に事情が異なり、両方の言語がすくすく伸びているというケースもあった。この4年生の男子(9歳)は、父親が日本語話者、母親がタイ語話者で、家庭では英語を使用、学校ではもちろん英語で学習している。英語OBCでは、導入会話は問題なく、基礎タスクを抜かして、対話タスクに入り、ほぼ100%こなし、そして認知

タスクでも90%の成績であった。「お話し」もゆっくりではあるが、かなり複雑な語彙、構文を駆使して6分も続く、長い話しをしてくれた。次はその一部である。

「1987年、殺人事件が起きました。警察たちはすぐに連絡をとりましたけれど、……。来たら遅かったです。人がだれか、あの、エアコンの中から覗いていたので、あの、いきなり、飛んで(きて)、その人のお腹のところの?を盗みました。

殺してしまった男は、ロバートトンプソンです。それで警察が来て、手がかりを探していました。そこで、一人の人が見つかりました。あの、ロバートトンプソンの飲んでいたワインのカップがテーブルの上に置いていて、あったはずなのに、……。なんかテーブルのなかにおいていませんでした。

そしてだれかがこの人を見ました。やっとな人の顔とか、プロフィールを知ってしまいました。ロバートトンプソンを殺してしまった人は、名前はアンドリュー、アンドリューカロルスです。……

(以下省略)

以上日本語は文法的正確さを欠くところがあるし、また不適當、不明瞭な言い回しも多々あるが、段落の意識もはっきりしているし、内容の豊かな話しになっている。では、英語ではどうかというと、大変スムーズ、英語の方が認知面までを含めて母語話者に近いという高度の評価を得ている。例えば、お話しでは、英語で読んだばかりだという「おむすびころりん」の話しをしてくれた。その一部を引用すると、つぎのようである。

Once upon a time there was the, um, little boy and he and his father lived together in his little barn. And they were really poor, that's why they lived in a barn. One day they...they, his father was going out to work. No. No. Wait. Yeah, it was a grandpa and grandmother and

they were living together. One day this, the grandpa, he was going to work to cut down some wood. And the grandma made him two rice balls. And so he went off to work. He got down and he chopped down about five six trees and he said that, "Well, it's lunch time. So, I'd better eat." And he was getting hungry too. So, he was about to pop a rice ball into his mouth when it just, um, a big one fell over; it took the rice ball right out of his hands and it went rolling down the hill. And it finally went down a big hole. And when you look down there, there was some voice singing. So, he wanted to investigate. So, he went down to the hole. And some little mice, they were all happy because they didn't have any food. (以下省略)

以上のように、OBCテストは、国内の国際学校、インターナショナルスクール在籍の多言語環境で育つ子どもたちの2言語、3言語にわたる会話力を多面的に捉え、どのような力関係でそれぞれのことばが伸びているか、どの面を強めれば、高度バイリンガルに近づくことができるかなどについて貴重なデータを提供してくれることが分かった。また2言語低迷型の子どもの早期発見に役立つことが確認された。

6. 継承語学習者（JHL）のためのOBC

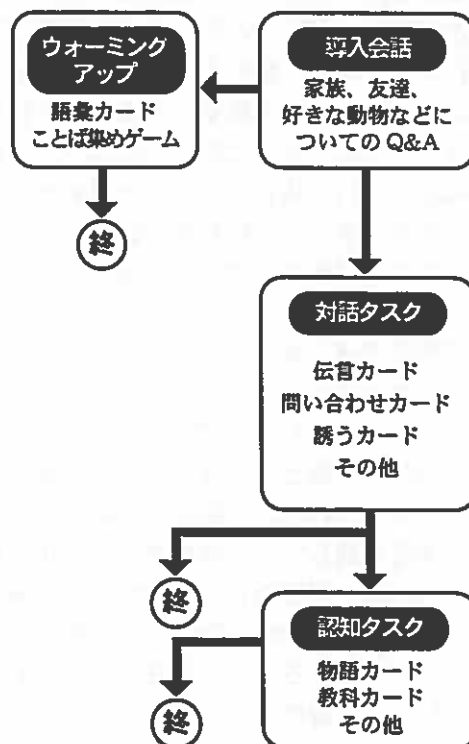
継承語学習者の場合は、右の図15のように、基礎タスクを除いた原型のフローチャートのテストが中心になる。しかし、一口に継承語学習者と言っても、ことばの力に非常なばらつきがあるため、基礎タスクが必要になる場合に備える必要がある。特に家庭で日本語を使用しない子どもの場合は、JFLの子どもたちのように基礎タスクを中心としたOBCテストが必要となる。⁸⁾

▼継承語学習者の場合、両親、または片親、あるいは、祖父母が日本人、日系人であるという特徴を踏まえて、導入会話では、例えばつぎのように、日系人であることの意識、また2つの文化の比較の質問などを加えるとよい。つぎの例はカナダの国語教室（継承語教育）の中学2年生に使用した例である。

【導入会話】追加

- ◆ 「どんな科目が好きですか」
- ◆ 「家でお父さんと話すとき、日本語で話しますか。〇〇語で話しますか」
- ◆ 「日本に親戚がいますか」
- ◆ 「将来、日本で働きたいですか。どうしてですか」
- ◆ 「日本語と〇〇語と、どちらの方が難しいですか」
- ◆ 「どんなところが難しいですか」
- ◆ 「将来、自分の子どもを日本語学校へ行かせたいと思いますか。どうしてですか」

図15 JHLのためのOBC



▼第5章、絵カードですでに述べたことであるが、子どもの文化的、社会的環境を配慮して、子どもの環境に合った語彙テスト、タスクにする必要がある。例えば、「スポーツ」カードで、子ども自身がその国では体験しにくいスポーツの場合は、その土地で体験しやすいものにする。例えば、冬国のスキーなどは、夏国ではローラーブレイドに代えた方がよい。また、子どもがどのぐらい電話を使用するかということなども国により、文化により異なるので、「伝言」、「問い合わせ」のタスクもその状況に合わせて、電話を使わずにどこかへ行って問い合わせをしたり、そこにいる人に伝言を残すというように変える必要がある。

▼継承語学習者の場合、現地のことばを現地校で学習に使うため、継承語はどうしても弱いことばになりがちである。このため同じ認知面のテストでも、理科や社会の教科学習と密着していて、特殊の語彙を知らないと答えられないようなタスクは適当ではない。国語の勉強をしている場合は、国語教科書と関連のある内容、または一般常識で答えられるようなタスクにする方が適切である。

▼毎日学校で使う現地語の力が圧倒的に強くなり、あまり使うチャンスのない日本語の力がいよいよ弱くなり、このアンバランスのため、なかなか両言語とも高度に発達する高度バイリンガルになれない。家庭日本語と課外の日本語学習を通して、高度バイリンガルを育てるためには、周囲の親や教師が互いに協力して、継承語と現地語の認知面の力がバランスをとって発達するように見守る必要がある。どうしても教育的介入が必要である。このためのツールとしてOBC会話テストを活用し、2言語の発達をモニターする必要がある。

実例4. カナダのJHL中学生

日系子女を対象とする土曜の午前中2時間半開かれる週末継承日本語学校、国語教室に10年間通い、あと一ヵ月先に卒業式を迎える中学2年生(13-14歳児)4名(男女2名ずつ)に1998年、日本語と英語のOBCテストを行った。ちょうど一年前、中学1年生7名に日本語OBCテストを行ったが、今年度は同じ7名に日本語OBCを再度行って、一年間の伸びを見ると同時に、カナダの継承語プログラムの最終学年で一体どのぐらいの日本語力、英語力がついているかを知るために行ったものである。残念なことに、土曜の午後特別行事があったため参加できない生徒がおり、2度目の

OBCテストを受けたのはたった4名であった。

これら4名は、いずれも幼稚部から国語教室に在籍、光村の国語教科書の4年の下までを終わって、その後教師自作の教材を使って日本語学習を続けて来た子どもたちである。これまでの学習時間総数は約800時間である。全員現地校で英語で学習している。家庭環境はそれぞれ異なり、両親日本語話者2名、片親日本語話者1名(家庭言語日本語と英語)、片親日系2世(家庭言語日本語と英語)1名である。

二部屋に分かれ、日本語を先行させて、日本語と英語のOBCテストを行った。いずれも2度目であるので、導入会話を簡略化する一方、日本語では、前ページに掲げた新しい日系子女向けの導入会話やチャレンジになる質問項目を加えた。たとえば、友達のことを聞く場合、「どんな友達ですか」という問いを加えて、友達の性格や友達との人間関係についての説明などを引き出すのである。また基礎タスクは省略、対話タスクは9の「誘う」、11の「ねだる」、12の「伝言」、23の「情報を得る」カードを使用、そして、認知面では13の「お話し」と14の「公害」、15の「地震」カードを用いた。英語も同じものを使用した。一人平均10分前後のテストであった。

中学生ともなると周囲の大人たちが、まるで当然のこのように、日本語は「弱いことば」であるが、英語は「強いことば」でネイティブと同じと思っているようであるが、実際はどうだろうか。調べてみると、導入会話は日英100%、対話タスクも日英ともほぼ100%、しかし、認知タスクとなると、日本語の得点の最高は90%、最低は67%であった。英語も同じような結果で最高得点は92%、最低は72%。いずれも日本語力が高い子どもは英語も高く、日本語力が低い子どもは英語

も低いという結果であった。

実際にどういうところに問題があるかというところ、まず発音では特に一人の生徒に [d] と「ら」行の混用があり、不明瞭な音が含まれるため、理解しにくい日本語になる。また同じ傾向が英語でも見られ、発音不明瞭な部分が目立った。文末がはっきりしないということも、その不明瞭さの原因の一つである。全体に、対話面の力は優れていて英語でも日本語でも流暢にテスターとのやりとりが出来たが、社会科、理科の特殊語彙を必要とするトピック、例えば、「地震」や「公害」についての説明をしたり、理由を述べたり、意見を言ったりとなると、語彙が不足し、話しがだらだらと繋がって、まとまりに乏しい。一方、「お話し」となると、2度目のテストでもあり、4人のうち3人までが3～4分かけて「三匹の子豚」の話をした。年齢的にその選択や話しの内容が幼稚であるという感は免れないが、一年前と比べて内容、完結性において進歩が見られた。

例えば、つぎは、一人の子どもの「三匹の子豚」の日本語版と英語版である。

「...あるところに、狼が住んでいました。その狼は、食べ物なくて、いつもおなかがすいていました。で、狼は、一匹目の子豚の家に行きました。狼は、一匹目の子豚のドアに、何回もノックしましたが、ぜんぜんこたえ、でません。その子豚は、中で隠れていました。どうしても子豚が出てこないの、狼は家を飛ばす、こわすことにしました。それ...で、大きく空気を吹いて、吸い込んで吹き飛ばしました。すると家は、すぐにこわれしました。ふっとんでいきました。豚もそのあとで、食べられました。狼は食べた、一匹目を食べたあと、まらおなかがすいていました。だから、つぎの家に行きました。

次の家は、二匹目の子豚が住んでいました。狼は、何回もドアをノックしましたが、ぜんぜん、だれもこたえ、ぜんぜんだれも出ませんでした。二匹目は、家の中に隠れていましたので、狼は空気をまた吸い込んで、大きく吸い込んで吹き飛ばしました。するとその家は、ストローでできていたので、すぐ飛んでいきました。それで、豚は、すぐ食べられました。..... (以下省略) 」

".....And they each had a house that they made by themselves. First one made a house out of straws, and the house was really fragile. And the second pig made a house with woods and mads...what.. And the third one, was a rich pig, who made his house out of bricks.

And one day... no... one day, there was a wolf who was really hungry.. He wanted to eat really, really badly. So he went to first pig's house, knocked on the door. He knocked so much time, but the pig didn't answer. So the wolf decided to blow the house away. He, he breathe in... breathe in.. a lots and the, he blew the houses away. When the house were all gone, there, there was a pig all hiding, hiding all by himself. The wolf run after and eat the pig....."

全体的に、日本語の文法的正確度から見るとかなり問題がある。例えば、基本的な助詞、やりもらいの動詞の使い分け、自動詞・他動詞の混乱、文のつなぎ方などに誤用が多い。英語では、3人称単数、名詞複数の's'が落ちる、時制の混乱などが見られる。また「問い合わせ」や「伝言」のように大人との会話で、英語でややフォーマルな応答が期待されるところで、"yeah"という非常にインフォーマルな応答がどの子にも見られた。

以上総括すると、英語、日本語の三面そろって

強い「高度バイリンガル型」に近いのは1名のみ、しかもこの生徒は、家庭で母親とは日本語、父親とは英語を話すバイリンガルであった。両親共日本語話者である2名を含め、残りの3名は、英語も日本語も基礎面、認知面で問題があった。このことは、日本語学校で国語教科書を使って10年勉強しても、認知面の日本語力が十分に伸びないこと、また、そればかりでなく、英語の認知面の習得においても、その発達にかなり時間がかかるということを示唆している。

もっとも特記すべきことは、会話テストを定期的にすることによって日本語会話への態度が変化したことである。もちろん人数が限られているため一般化はできないが、会話力テストがあるということが引き金になって、日本語で話すことに興味を持ち、日本語に対して積極的態度を示すようになることが観察された⁹⁾。認知面の問題点が日本語と英語で共通している点が多いことから、生徒自身が意識して日本語の会話力を引き上げることができれば、英語の認知面の力も同時に伸ばせるのではないかと思われる。

7. 第2言語学習者（JSL）のためのOBC

国内の公立小・中学校の中で第2言語として日本語を学習している外国籍の子どもの場合は、16ページに示した原型と同様の三面の幅の広いテストが必要である。

日本語の発達、および母語の保持には、年齢要因に加えて複雑な要因が絡む。例えば、滞日年数、入国時年齢、家庭言語、帰国回数、母語保持教室の有無などが主なものである。日本語が社会の主要言語であると同時に、学校言語でもあるので、子どもたちにかかる日本語学習へのプレッシャーは大きい。そのため、その発達が非常に速い。また、日本語を生活言語、学習言語として使用するので、対話面、認知面両面がかなり高度に発達する。一方、この子どもたちの母語の方は、日本には母語保持教育、継承語教育が定着していないため、多くの外国籍の子どもの母語保持は親に任された形になっている。そのため、母語の力は日本語の習得が進むにつれて、急速に落ちていくようである。

外国人子女が母語も伸ばすと同時に、日本語を効率よく習得できるように、現場の教師がOBC会話テストを使用して、両言語の発達状況をモニターすることは、非常に教育的に意味のあることである。外国人子女のためのJSLOBCの一例として、国立国語研究所との協力で開発したものを、この章の終わりに掲げた。注意事項も添えてある。また同じく、国立国語研究所との協力で開発されたブラジル人子女用のポルトガル語OBCと中国帰国子女用に中国語OBCも添えた。いずれも母語話者の意見を参考に、それぞれの言語文化に適するように開発したものである。

OBCテストを実施するに当たっては、次のよう

な点に留意するとよい。

▼対象児の滞在年数にばらつきがある場合は、基礎タスク、対話タスク、認知タスクと幅広い日本語会話テストを用意する必要がある。大体の目安として、滞在年数が2年以下の場合は、導入会話に加えて、基礎タスクを行い、2年以上の場合は、基礎タスクを除いて、対話タスク、認知タスクのみのテストが可能だと思ってよい。

▼毎日の生活全体で日本語に接触するので、対話タスクにはいろいろな場面が使える。またいろいろなタイプの日本語に触れることができるので、テスターが使える語彙や話体の範囲が広い。しかし、一方、家庭での日本語接触には個人差があるので、家庭を中心とした場面はなるべく避けた方がよい。

▼第2言語学習の目的は、学校の授業についていけるだけの日本語をなるべく短期間に習得することにある。したがって、教科学習との結びつきを大事にし、年齢相当の認知面のタスクを加えるようにするとよい。しかし、この場合、第2言語の認知面の習得には、基礎言語面、対話面に比べて非常に時間がかかるということを忘れてはならない。大体の目安として認知タスクでは、母語話者と比べて、ほぼ4年遅れの差があると思っていただけの方が無難であろう。これまでの日本国内におけるJSLのフィールドテストでも、日本在住の日本語母語話者の子どもが5、6年生で到達する認知面は、外国人子女の場合、大体中学生ぐらいになってやっと追い付くようである。

▼少数言語である母語は後退過程にあるため、特別な配慮が必要である。話せたことばがだ

んだん話せなくなるという焦燥感、無力感に悩まされている子どもたちも多い。このため、現地語テストでは勢よく話す子どもも、母語では、声が小さくなり、顔も俯き加減、非常に消極的になる。テストはこのような子どもの心理面に十分配慮しなければならない。特に、大きな母語集団やコミュニティと離れて、孤立したている場合は、母語を使用する場が家庭内に限られる。そのため、対話面の場を家庭中心にする必要がある。また母語で教科学習をするケースは少ないため、認知面のタスクも一般的なトピックに限るべきであろう。

▼母語テストに関しては、継承語のOBCと同じように、〇〇(系)人であることの意識、また母国と日本語の学校の比較、文化の比較などの問題を加えるとよい。この点については、6の継承語学習者(JHL)のためのOBCを参照していただきたい。

実例5. 国立国語研究所の外国人子女調査

JSL用OBCの実例として、国立国語研究所のプロジェクトで使用したOBCテストをここに紹介しておきたい。

国立国語研究所のプロジェクトは、日本の公立小・中学校に在籍する外国人生徒と日本語力の発達と母語の保持というテーマで、1998年5月から1999年3月に全国的規模で行われた調査である。その一部でOBCテストを使用し、ポルトガル語話者と中国語話者の小学生、中学生に日本語と母語のテストを行った。対象児、それぞれ約100名ずつの大きな調査である。

JSLOBCTESTの作成に当たっては、まず、ウォー

ミングアップとして、TOAM口頭語彙テストを使用した。導入会話には、原型に加えて、「学校の比較」に関する質問をした。基礎タスクでは、1の「部屋」、3の「教室」、5の「職業」、18の「やりもらい」の4枚の絵カードの他、「感情」カードを使用した。「感情」カードは、7の「季節」と29の「あやまる」カードの前身となったもので、形容詞の基本形の習得度を見るためのカードである。つぎに対話面は、9の「誘う」、10の「問い合わせ」、11の「ねだる」、12の「伝言」カードの4枚、そして、認知面では13の「お話し」と14の「公害」カードのほかに、教科との関係を考慮し、15の「地震」、16の「食物摂取」、そしてカードなしの「文化比較」を加えた。以上、いずれの言語でも所要時間約10~12分のテストである。

現在、OBC会話テストの採点結果が現在集計されつつあり、その結果が待たれるところである。

8. 補習校生徒（JNL）のためのOBC

補習校や日本人学校の子どもたちにOBCを実施する場合は、17ページの原型のフローチャートを土台に、教科と関連づけた年齢相応の認知タスクを加えるとよい。残念なことに、これまでのフィールドテストにはほとんど補習校生徒が含まれていないために¹⁰⁾、実例を示すことができない。

JNL用OBC作成に当たっては、つぎのような配慮をする必要がある。

- ▼一口に補習校生徒と言っても、話す力が日本で育つ子どもと全く変わらない場合もあれば、かなり日本語の力が落ちて、がたがたになっているケースもある。したがって、対象児の日本語のレベルが全く分からない場合は、基礎タスクから認知タスクまでを幅広く盛り込む必要がある。
- ▼現地語の会話力も、滞在年数によって非常なばらつきがあることが予想されるので、基礎タスクから認知タスクまでを幅広く盛り込んだテストが必要である。この場合は、第2言語学習であるので、7. 第2言語学習者 (JSL) のためのOBCを参照していただきたい。
- ▼海外の滞在が長期にわたる場合や、現地生まれの子どもの場合は、補習校、日本人学校に在籍していても、継承語学習者と同じ配慮が必要である。最近は補習校の中に継承語学習者や国際結婚などによる家庭2文化児が増えている。日本語の教科書を使用して、各教科の学習をしていく上で、教科学習に耐えるだけの日本語力があるのかなのか、その判断に苦しむことが多い。特に学校生活の入り口

のところにいる幼稚園児、一年生には、年少者（5-6歳児）のためのOBC、高学年の場合は、継承語学習者（JHL）のためのOBCを参照して、JNLOBCの作成に当たっていただきたい。

¹⁾ これはジャイルズ校で使用したものである。85-87 ページ参照。

²⁾ 国語教室（正式にはトロント国語教室日本語学校）は、戦後移住者父母により1976年に設立され、1981年1月より、トロント市教育委員会の Heritage Language Programme の適用、財政的援助を受け、現在に至る継承語学校である。1999年現在生徒数120名、基礎学級として幼稚部から中学2年生までの10レベルと、中学2年生以上を対象としたアドバンスクラス2つである。年間授業回数は35週。9月から6月までである。授業は土曜の午前中の2時間半である。開校当初は、ほとんどの生徒の両親は日本からの移住者であり、移住歴も浅かったため、学習者の年齢も低く、家庭言語は当然日本語のみという家庭が多かった。したがって、教材も日本の国語教科書をそのまま使い、スピードを落として一年分の教材上下2巻を2年かけてこなすことができた。その指導法も国語教育に準じた方法で、学習効果をあげることができたのである。しかし、時間の経過とともに、子どもたちの英語へのシフトがすすみ、さらに、社会情勢の変化と相まって、1990年ごろより、学習者の多様化が加速され、現在に至っている。過去3年間における新入生で、両親日本語話者というのは10%以下という状況になっている。

³⁾ 羽・翼、およぐ、はをみがく、着る、起きる、座る、おこる、ほそい、短いの9語である。

⁴⁾ B-VATについては14ページ注4を参照のこと。

⁵⁾ 授業はすべて日本人教師により、日本語で行われ、会話教育に加えて、一年目にひらがな、カタカナ、漢字50を学習している。

⁶⁾ 因子分析 (Varimax Rotation) を行った結果、3つの因子を取り出すことができた。因子1会話力総合、因子2英語使用、因子3算数口頭問題である。因子1会話力総合で全体の55.1%、因子2英語使用で61.6%、因子3算数口頭問題66.9%となり、これら3つの因子で会話力全体の約70%が説明できる。

⁷⁾ OBCテストに加えて、次の3つのアンケート調査を行った。日本語学習に対する情意調査(12項目)、モチベーション調査(4項目)である。この結果、因子2の英語使用が日本語に対する否定的な態度とつながっていることが分かった。つまり、英語使用が多い学習者は、日本語の勉強は「大事ではない」、「時間の無駄である」、「つまらない」、「興味なし」という態度を持っている傾向がある。また形容詞の対語を使った情意調査でも、英語使用の多い学習者は、日本

語は「大切ではない」、「役に立たない」、「醜い」、「つまらない」などと感じていること、また、日本語学習への動機付けでも、同じような傾向が見られ、英語使用の多い子供は、日本語は「役に立たない」、「日本語を知っていても人に尊敬されない」などという姿勢を持っていることが分かった。

⁸⁾ 国立国語研究所の佐々木倫子氏は、ブラジルのベレン、米国のハワイ州の日系子女の研究調査の一貫としてOBC(原型)を使用した。その結果から見ると、対話面、認知面では上級の一部の生徒を除いて問題があり、同じ継承日本語教育でも、基礎タスクを中心としたJFL用に近い形のものであった。

⁹⁾ 2度目のテストの後、全員その結果に興味を持ち、生徒自身で日本語テストを収録したビデオを見たいと言った。これは自分達の日本語に対する積極的興味の考えられると思われる。

¹⁰⁾ 実はカナダのアルバータ州南部の経済的主要都市にあるカルガリー補習校で、校長を始め、熱心な教師たちの要請によって、OBCプロジェクトが一年生を対象に補習校用OBCテスト(小学校1年生対象)を作成した。補習校の子どもたちは、週日は現地校で英語で学習、土曜日に補習校で国語と算数を学んでいる。最近長期滞在、永住家族、また国際結婚子女が増え、将来の国語教科書中心の授業についていけない生徒が増えている。そのため、1年の入学当初の会話力を測定して、学校全体の国語への取組み方を検討したいという目的で1998年10月に行ったものである。その後の実施結果についての詳細は明らかではない。



4 外国人子女 (JSL) OBC フローチャートと注意事項

テストターの発話	注意事項
<ul style="list-style-type: none"> ◆ 自己紹介をする。(必要な場合のみ) ◆ 「今日は__さんがどのくらい日本語でお話し出来るか教えてください。分からないときは『分かりません』と教えてください。全部で15分ぐらいです。いいですか」 	<ul style="list-style-type: none"> ▼ テーブルの角などを利用し、カードを真ん中にし、はず向かいにすわる。真向かいに座らないこと。 ▼ テープレコーダー/ビデオカメラを調整すること。 ▼ カードは伏せておく。
<p style="text-align: center;">【導入会話】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「こんにちは」 ◆ 「お名前を教えてください」 ◆ 「(日本語学校では) 何年生ですか」 ◆ 「いくつですか」 ◆ 「お誕生日はいつですか」 ◆ 「お姉さん/お兄さんがいますか」 ◆ 「友達がありますか」 ◆ 「友達の名前は？」 ◆ 「どんなことをして遊びますか」 ◆ 「__さんとは日本語で遊びますか」 ◆ 「(お姉さん) とは__で話しますか？」 ◆ 「どんな動物/授業(科目)が好きですか」 ◆ 「どうして好きですか」 ◆ 「日本の学校で好きなことは何ですか。きらいなことは？」 ◆ 「どうしてですか」 	<ul style="list-style-type: none"> ▼ 面接時によって挨拶語を変える。 ▼ 「お」を省略してもよい。 ▼ 「日本語学校」の代わりに、「補習校」「〇〇の学校」でもよい。 ▼ 「何歳ですか」と聞いてもよい。 ▼ 家族構成について補足質問をしてもよい。 ▼ 基礎タスクのロールプレイで必要になるので、必ず友達の名前を記憶するか、書き取るかしておくこと。 ▼ 低学年の場合は動物、高学年の場合は授業(科目)について質問する。
<p style="text-align: center;">【ウォーミング・アップ】 語彙テスト</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「これは何ですか。そう、__ですね。では、(テストター) が1と言ったら、『__』と教えてください。2と言ったら、これ(指で2の絵を指しながら)を教えてください。分からないときは、『わかりません』と教えてください。いいですか。では、1」 	<ul style="list-style-type: none"> ▼ 単語絵カード使用 ▼ テスターはカードの絵を指で差したり、指で絵をかくしたりしないこと。
<p style="text-align: center;">【基礎タスク】</p> <p>1 「部屋」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「この部屋に何がありますか」 ◆ 「鉛筆はどこにありますか」 ◆ 「猫(または男の子/女の子)は？」 ◆ 「どこにいますか」 ◆ 「テレビは？」(絵にないものについて聞く) ◆ 「この部屋に時計がありますか/ね」 ◆ 「今何時ですか」 	<ul style="list-style-type: none"> ▼ 部屋の中にある物について言いたいだけ言わせる。 ▼ 答えにすでに時計が含まれていた場合は、「ね」となる。

テストターの発話	注意事項
<p>2 「スポーツ」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「_____が出来ますか」 ◆ 「どんなスポーツが好きですか」 ◆ 「いつ、どこで、だれと_____をしますか」 ◆ 「サッカー／ピンポンをしたことがありますか」 ◆ 「_____と_____と、どっち（の方）が好きですか」 <p>3 「教室」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「この人は生徒ですか。先生ですか」 ◆ 「なんとやっていると思いますか」 <p>4 「日課」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「今朝何時ごろ起きましたか」 ◆ 「それから、何をしましたか」 ◆ 「いつも何時ごろ寝ますか」 <p>5 「感情を表わす」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「どの子がおなかがいたいですか」 ◆ 「この子は悲しいですか」 ◆ 「この女の人はどうしておこっていますか」 <p>6 「職業」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「_____（被験者の名前）は大きくなったら、何になりたいですか。」 ◆ （答えがない場合）「（お医者さん）は？」 ◆ 「どうして_____になりたいですか」 <p>7 「やり・もらい」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「今日はおばあさんのお誕生日です」 ◆ 「この子は今何をしていますか」 ◆ 「お誕生日の人に何と言いますか」 	<p>▼まだスポーツを直接経験していない子どもの場合は、親や年上の兄弟が好きなスポーツについて聞くといよい。</p> <p>▼年少の被験者で、単語が分からないために答えられない場合は、テストターが絵を指で差し、「これ？」というような誘導質問をするとよい。</p> <p>▼7の「季節」カードと29の「あやまる」カードの前身となったもの。</p>
<p style="text-align: center;">【対話タスク】</p> <p>1 「伝言」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「_____（当人の名前）は家にいます。お母さんは います。電話がかかってきました。電話に出てください。そして、名前と電話番号を聞いてください」 ◆ 「もしもし、_____さんのお宅ですか」 ◆ 「お母さんいらっしゃいますか」 ◆ 「いつお帰りになりますか」 ◆ 「そうですか。じゃ、お帰りになったらすぐ電話してくださいと伝えてください」 ◆ 「山田です。電話番号は222-1234です」 ◆ 「お母さんが帰ってきました」（自分をさして） ◆ 「お母さんです」（テストターが会話を始める） ◆ 「ただいま。電話あった？」 ◆ （答えが出なかったら）「何ですって？」 ◆ 「そう、どうもありがとう」 	<p>▼テストターはやや体の向きを変え、生徒と顔を合わさないようにして電話をする。</p> <p>▼名前と電話番号を書き取らせてもよい。</p> <p>▼テストターの役割が変わることに注意。母親／父親になって、会話を切り出すこと。</p>

テスターの発話	注意事項
<p style="text-align: center;">【対話タスク】</p> <p>2 「ねだる」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「あなたは新しい自転車（またはゲーム）がほしいと思っています。お母さんに頼んでみてください（ゲームの場合）」 ◆ 「もうたくさんあるでしょう？」 ◆ 「ゲーム買ったら、勉強しないでしょ？」 ◆ 「お父さんと相談してみようね」 <p>3 「誘う2」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「今日は____さんのお誕生日です。家でお誕生日パーティーをします。ケーキを食べて、そのあとゲームをして遊びたいと思っています。____さんを誘ってください。学校の門のところで会いました」 <p>4 「問い合わせ」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「近くに新しい____ができました。____（当人の名前）は土曜日に____に行きたいです。でも、土曜日にいるか、何時からあくか、いくらかかるか、分かりません。____に電話していろいろ聞いてください。そして、最後にお礼を言ってください」 	<p>▼テスターは臨機応変に対応しなければならない。（自転車の場合）</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「まだ古いのが使えるでしょう」 ◆ 「スピードが出るのは危ないから」 ◆ 「お父さんと相談してみようね」 <p>▼導入タスクで聞いておいた友達役をテスターがする。</p> <p>▼3と4は子どもが積極的に話しを切り出し、会話をリードできるかどうかを見るものであるから、テスターが主導性をもってしまわないように注意。</p> <p>▼いつ、どこで、だれの質問のうち、2つ答えられればよい。</p> <p>▼問い合わせ先は子どもの生活の中で身近な場所を選ぶ。 例：市民プール（5時～9時）子ども料金200円、動物園（低学年）子ども料金200円。</p>
<p style="text-align: center;">【認知タスク】</p> <p>1 「お話し」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「小さい子（ども）が何かお話ししてと頼みました。お話しをしてあげてください」 <p>2 「地震」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「地震にあったことがありますか」 ◆ 「どうでしたか。その時のことを話してください」 ◆ 「地震のときはどうしたらいいですか」 ◆ 「どうして地震が起こるか学校で習いましたか」 ◆ 「どうして起こるか説明してください」 <p>3 「公害」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「地球が泣いています。どうして泣いていると思いますか。どうすればいいと思いますか」 <p>4 「食物摂取」カード</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「りんごを食べると、どうなりますか」 <p>5 「比較」（カードなし）</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「____と____は、どう違いますか」 (1) 日本の食べ物（または家）と〇〇の食べ物（低学年） (2) 日本の学校とあなたの国の学校（高学年） ◆ 「どちらの方がいいと思いますか」 	<p>▼なるべく「三匹のこぶた」を勧める。</p> <p>▼もしどうしてもお話しが思い浮かばないようだったら、「じゃ、教科書で読んだ話しを一つしてください」と言う。</p> <p>▼低学年の場合リサイクルの話にもっていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「学校でリサイクルをしていますか。家ではどうですか」 ◆ 「どうしてリサイクルをしますか」 <p>▼もしリサイクルということばが分かりにくい場合（たとえば、ポルトガル語の場合）は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「空き缶を集めたり、____たりしていますか」 <p>▼日本に来る前に母国で学校体験をしている場合のみ(2)の学校の比較の質問をする。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ◆ 「なにか質問がありますか。では、今日はどうもありがとうございました」 	



5 ブラジル人子女 (JSL) OBC : ポルトガル語

【導入会話】

“Conhecendo Um Ao Outro”

- ◆“Oi, o meu nome é (nome do/da examinador/a).”
- ◆“Qual é o seu nome?”
- ◆“Em que série você está?”
- ◆“Quantos anos você tem?”
- ◆“Quando é o seu aniversário?”
- ◆“Você tem irmãos e irmãs?”
- ◆“Você tem amigos?”
- ◆“Qual é o nome de um amigo seu?”
- ◆“Que tipo de animal (matéria escolar) você gosta?”
- ◆“Quantos anos tem o/a seu/sua irmão/irmã?”
- ◆“De que você gosta de brincar com o seu/sua amigo/a?”
- ◆“Por que você gosta daquele animal (matéria escolar)?”

Perguntas Relacionadas:

- ◆“O que você mais gosta ou menos gosta nas escolas japonesas? Por quê?”
 - (1) almoço na escola
 - (2) o estudo de kanji
 - (3) matematica
 - (4) tarefas de limpeza da escola
- ◆“Quando você está falando com pessoas da sua família, que língua você usa, japonês ou português?”
 - (1) com o seu pai
 - (2) com a sua mãe
 - (3) com o seu irmão ou irmã mais velho/a
 - (4) com o seu irmão ou irmã mais novo/a

【ウォーミングアップ】

“Vamos Jogar Um Jogo”

- ◆“Cartões ilustrados de Vocabulário”
 - ◆“O que é isso?”
- (O/A examinador/a diz: Eu vou dizer o número e você me diz o nome da gravura. Se não souber não faz mal, simplesmente diga: “não sei.”)

【基礎タスク】

“Tarefas Básicas”

- 1 “Sala”
 - ◆“Diga-me o que você vê nesta sala?”
(se o/a examinador/a não conseguir responder a pergunta acima, pergunte “O que é isso?” Apontando para um item numa gravura ou desenho).
 - ◆“Tem lápis?”
 - ◆“Tem gato?”
 - ◆“Onde ele está?”
 - ◆“Tem televisão?”
 - ◆“Tem relógio?”
 - ◆“Que horas são?”
- 2 “Esportes”
 - ◆“Você sabe jogar ____ ?”
 - ◆“Qual tipo de esportes você gosta?”
 - ◆“Quando, onde e com quem você joga ____ ?”
 - ◆“Você já jogou futebol?”
 - ◆“Qual esporte você prefere ____ ou ____ ?”
- 3 “Sala de Aula”
 - ◆“Ela é professora ou aluna?”
 - ◆“O que você acha que ela está falando?”
- 4 “Rotina”
 - ◆“A que horas você acordou hoje?”
 - ◆“O que você fez depois de acordar?”
 - ◆“A que horas você dorme todos os dias?”
- 5 “Sentimentos”
 - ◆“Qual deles tem dor de barriga?”
 - ◆“Qual deles está triste?”
 - ◆“Porque ela está zangada?”
- 6 “Profissão”
 - ◆“O que você quer ser quando crescer?”
(se o/a aluno/a não responder dê uma sugestão, como “que tal médico?”)
 - ◆“Por que você quer ser ____ ?”
- 7 “Dando e recebendo”
 - ◆“Hoje é o aniversário da vovó.”
 - ◆“O que esta criança está fazendo?”
 - ◆“O que se deve dizer para alguém que esta fazendo aniversário?”

【対話タスク】

"Tarefas de Comunicação"

1 "Tomando Um Recado"

- ◆ "Alguém está telefonando para a sua casa. Ninguém está em casa agora. Por favor atenda o telefone."
- ◆ "Alô, aqui fala a dona Maria. A sua mãe está em casa?"
- ◆ "Você poderia pedir a ela para me telefonar quando ela voltar?"
- ◆ "Meu nome é Maria. Meu telefone é 222-1234."
- ◆ "Em seguida a sua mãe chega em casa."
(O/A examinador/a aponta para si mesmo/a)
- ◆ "Eu sou a sua mãe."
- ◆ "Oi, alguém telefonou?"
- ◆ "Obrigado."

2 "Negociando"

- ◆ "Você gostaria de ter uma bicicleta nova (ou um vídeo geime). Então você vai pedir uma bicicleta nova (ou um vídeo geime) para o seu pai ou sua mãe. Como é que você pediria?"

3 "Convidando (2)"

- ◆ "Hoje é o seu aniversário e você vai dar uma festa de aniversário. Lá vai haver bolo e vocês vão jogar juntos. Convide o/a seu/sua amigo/a se ele/ela pode vir a sua festa. Imagina que você encontra o/a seu/sua amigo/a na frente da escola e aí você o/a convida."

4 "Pedindo Informação"

- ◆ "Você está indo no sábado a/ao _____. Telefone ao lugar e descubra:
- a) Se este está aberto aos sábados,
- b) A que horas está aberto aos sábados,
- c) Quanto custa a entrada para crianças, etc."

【認知タスク】

"Tarefas Acadêmicas/Cognitivas"

1 "Contando Uma História"

- ◆ "Uma criança pequena pede para você contar uma história para ela/ele. Conte uma história para ela/ele."

2 "Terremoto"

- ◆ "Oh, é um terremoto. O que devemos fazer?"
- ◆ "Porque os terremotos acontecem? Por favor explique."

3 "Poluição"

- ◆ "A Terra está chorando. O que nós podemos fazer sobre isto?"

4 "Sistema Digestivo"

- ◆ "Você sabe o que acontece com o alimento (maçã) depois que a gente come?"

5 "Comparação"

- ◆ "O quanto diferentes eles são?"
- (1) comida brasileira e comida japonesa (séries 1-2)
- (2) casas brasileiras e casas japonesas (séries 3-4)
- (3) bairro brasileiro e bairro japonês (séries 3-6)
- (4) escola brasileira e escola japonesa (séries 3-9)
- (5) brasileiros e japoneses (séries 5-9)



6 中国人子女 (JSL) OBC : 中国語

OBC 测验问题

【導入会話】 [准备部分]

- ◆ “你好!”
- ◆ “你叫什么名字?”
- ◆ “你是哪年生的?”
- ◆ “今年几岁了?”
- ◆ “什么时候过生日?”
- ◆ “你有姐姐 / 哥哥吗?”
- ◆ “你有朋友吗?”
- ◆ “他叫什么名字?”
- ◆ “你们在一起玩什么?”
- ◆ “你和_____玩时讲日语吗?”
- ◆ “你和 (你姐姐) 说话时, 说哪国语?”
- ◆ “你喜欢什么动物/你喜欢上什么课?”
- ◆ “为什么喜欢?”
- ◆ “你喜欢日本学校的什么 / 你不喜欢日本学校的什么?”
- ◆ “为什么喜欢 / 为什么不喜欢?”

【ウォーミングアップ】 代替游戏 (使用图片)

TAOM 口头表达能力测试 (词汇)

“这是什么? 对, 是_____。那么, 我说 1 你就说:”_____, “我说 2 你就说:”_____. 不懂时, 就说:”_____, わかりません”。好吗? 那么, 1”。

【基礎タスク】 [基础部分]

- (1) (让参加考试的人看“房间”图片, 提下面的问题.)
- ◆ “这个房间里有什么?”
 - ◆ “铅笔在哪儿?”
 - ◆ “猫 (或者男孩 / 女孩) 呢?”
 - ◆ “在哪儿?”
 - ◆ “电视呢?” (问图片里没有的东西)
 - ◆ “这个房间里有表吗?”
 - ◆ “现在几点钟?”
- (2) (让参加考试的人看“体育运动”图片, 提下面的问题.)
- ◆ “你会_____吗?”
 - ◆ “你喜欢什么体育运动?”
 - ◆ “你踢过足球 (打过乒乓球) 吗?”
 - ◆ “_____和_____比较, 你喜欢哪个?”
- (3) (让参加考试的人看“教室”图片, 提下面的问题.)
- ◆ “(指图片左上方老师的图) 这个人是学生还是老师?”
 - ◆ “你猜一猜她在说什么?”
- (4) (让参加考试的人看“作息时间”图片, 提下面的问题.)
- ◆ “你今天早晨是几点钟起床?”
 - ◆ “起床后做什么?”
 - ◆ “你平时晚上几点钟睡觉?”
- (5) (让参加考试的人看“表达感情”图片, 提下面的问题.)
- ◆ “哪个孩子肚子疼?”
 - ◆ “这个孩子在悲伤吗?”
 - ◆ “这个女的为什么生气了?”
- (6) (让参加考试的人看“职业”图片, 提下面的问题.)
- ◆ “_____ (参加考试人的名字) 长大了想当什么?”
 - ◆ “(不回答时提示) 想当 (医生) 吗?”
 - ◆ “为什么想当_____?”
- (7) ((让参加考试的人看“接受”图片, 提下面的问题.)
- ◆ “今天是他奶奶的生日。”
 - ◆ “这个小孩在做什么?”
 - ◆ “跟过生日的人说什么?”

【対話タスク】
【会話部分】

(1) “传言” 图片

- ◆“_____ (参加考试人的名字) 在家, 妈妈不在家。来电话了, 你去接电话。问一问来电话人的姓名和电话号码。”
- ◆“喂, 是_____家吗?”
- ◆“你妈妈在家吗?”
- ◆“她什么时候回来?”
- ◆“是吗, 那么她回来后, 你告诉她马上给我回电话。”
- ◆“我叫山田, 电话号码是: 222-1234。”
- ◆“妈妈回来了。” (指自己说)
- ◆“我是妈妈。” (监考开始说)
- ◆“我回来了。来电话了吗?”
(回答不出来时) “谁来电话啦, 说什么啦?”
- ◆“是吗, 谢谢。”

(2) “要东西” 图片

- ◆“你想买一台新自行车 (或者娱乐品) 你让你妈妈给你买。”
(娱乐品) (自行车)
- ◆“你不是买了不少了吗?” ◆“旧了一点儿, 但还能骑。”
- ◆“给你买棋, 你是不是就不学习了?” ◆“骑得太快了危险。”
- ◆“你去问问你爸爸。” ◆“你去问问你爸爸。”

(3) “约会”

- ◆今天是_____ (参加考试人的名字) 的生日。准备吃蛋糕, 做游戏, 在家里庆祝生日。你问一问_____ (同学的名字) 来不来。早晨你们在学校门前见面了。

(4) “询问” 图片

- ◆_____ (参加考试人的名字) 星期六想去市民游泳池。可是, 不知道星期六开不开门, 几点开门, 还有入场券多少钱也不知道。你给游泳池打电话问一问。(要向他 / 她说谢谢。)

(市民游泳池 5点-9点 儿童票价 200日元)

【認知タスク】
[認知部分]

(1) (让参加考试的人看“故事”图片, 提下面的问题)

◆“小孩要听故事, 你给他讲一个故事吧。”

如果参加考试的人想不起来故事的话, 可以提醒。

“那么, 你讲一个在电视里看过的动画片故事吧。”

(2) (让参加考试的人看“地震”图片, 提下面的问题。)

◆“你遇到过地震吗?”

◆“那时是什么情景, 你讲一讲那时的事好吗?”

◆“发生地震时怎么办?”

◆“为什么发生地震, 你在学校学过吗?”

◆“你讲一讲为什么要发生地震。”

(3) (让参加考试的人看“公害”图片, 提下面的问题。)

◆“地球在哭。你知道它为什么哭, 你认为怎么办才好?”

(4) (让参加考试的人看“摄取食物”图片, 提下面的问题。)

◆“吃了食物后会怎么样?”

(5) ___和___有什么不同? (“比较”没有图片, 提下面的问题。)

(1) 日本吃的东西和自己国家吃的东西 (G1/2)

(2) 日本房子和自己国家的房子 (G3/4)

(3) 日本城市和自己国家的城市 (G3/6)

(4) 日本学校和自己国家的学校 (G3/9)

(5) 日本人和中国人 (G5/9)

(6) 你认为哪一个比较好?